

翻 訳

アルギュラ・フォン・グルムバッハによる宗教改革的文書(2)

—アルギュラ・フォン・グルムバッハ稿「ジーマルンのヨハン宛ての書簡 (1523)」

「アダム・フォン・テーリング宛ての書簡 (1523)」 「レーゲンスブルクの人々宛ての書簡 (1524)」の翻訳—

伊勢田 奈 緒

1. 緒言

ここに翻訳したものは、アルギュラ・フォン・グルムバッハによる著作のうち三点である。まず、最初のものは1523年12月1日付けの『ジーマルンのヨハン宛ての書簡』ある。ジーマルンのヨハン（プファルツ伯）は、パラティンの選定候フレデリックの代理で当時、ニュルンベルクに帝国政府の皇帝の代表として来ていた。そこで、彼はアルギュラ・フォン・グルムバッハにある会合で偶然、出会った。彼は彼女に腹藏なく思うところを述べるように言われ、その言葉を受けて、その通りにし、また、この書簡を送ったようである。ここでの彼女のメッセージは、宗教改革者たちに反対するが、中立の立場をとっているヨハンに、この世の権力を恐れず、立ち上がって欲しいというものである。尚、本書簡は1524年と1557年のシュトラスブルクの2つの彼女の全集とは別に、単独で3版を重ねている。次の書簡は、1523年終わりに書かれたとみられる「アダム・フォン・テーリング宛ての書簡」である。これはアルギュラ自身の家族がルターの運動を支持する彼女にいかに対処していたかがわかる書簡である。このことに対して彼女が弁明のために従兄弟のアダム・フォン・テーリングに宛てて書いたものである。教会からも国家からも一族からも反対されている彼女の窮地の現状と共に、彼女の強い信仰心と使命感が窺える書簡である。また、説教壇や裁判所や、市の役所などの公共の機関から閉めだされた彼女であるが、出版という新しいメディアを用いて、彼女が人々に真の福音を呼びかけたということがわかる。尚、「ジーマルンのヨハン宛ての書簡」と同様に、

本書簡は1524年と1557年のシュトラスブルクの全集とは別に、単独で、アウグスブルクのフィリップ・ウルハルトから、おそらく1523年の終わりに、ただ一版だけが発行されている。最後は、1524年6月29日付けの印がある「レーゲンスブルクの人々宛ての書簡」である。これはレーゲンスブルクで国会が開かれ、ルターに対してヴォルムスの勅令を行使することが議され、これに対してアルギュラが慌てて、この抗議の書状を送ったものと見られる。尚、この書簡はニュルンベルクのハンス・ヘルゴットから一版だけ発行された、わずか、2ページのものである。

2. 翻訳

① 『ジーマルンのヨハン宛ての書簡 (1523)』
私の最も敬愛する、ラインのパラティン伯爵・バイエルンの公爵・スパンハイムの伯爵である、高貴な君主、ヨハン閣下へ¹⁾

1) * Dem Durchleüchtigen Hochge//bornen Fürster vnd herren/Herr [e] n Jo=//hansen/Pfaltzgrauen bey Reyn/ //Hertzoge [n] zu Beyern / Grafen// zu Spanhaym etc.Mey=//nem Gnedigisten//Herren.//Argula Staufferin. //((Augsburg:Philipp Ulhart d.Ä.1523?)3Bl.,4°
*Ermanung an den//Durchleuchtigen hochge//bornen fürsten vnd hern//herren Johannsen Pfaltz//graue [n] bey Reyn Hertzoge [n] //in Bayrn vnd Grauen zu//Spanhei etc.Das seyn//F.G.ob dem wort gottis halten w?ll.Von einer//erbaren frauen vom//Adel sein [n] gnaden//zugeschickt.//Argula von Stauff.//((Bamberg: Georg Erlinger 1523)2Bl.,TE(mit Jahreszahl), 4°
*Dem Durchleutigiste [n] //Hochgebornenn Fürsten//vnd herren/Herr [e] n Jo=//hansen Pfaltzgrauen//bey Reyn/Hertzogen//zu Beyern /Gra=//uen zu Span=//heim.etc.mey//nem Gnedi=//gisten herre [n] //Anno.M.C.xxiiij.//Argula Staufferin.//((Erfurt:Wolfgang Stürmer 1524)2Bl.,T.E, 4°

アルギュラ・フォン・シュタウフェンより神の恵みと平安と、聖霊の導きが、貴方様のもとに、今もそして永遠に留まりますように。高貴で、慈悲深い君主様、私が昨晚、閣下と他の貴族の方々の食事に招かれ、非常に感謝しておりますが、その時、私は貴方様のいくつかの発言から、貴方様が聖書を読み始められ、神の言葉に光を見、神の言葉を認められ始めたことを感じとり、そのことに少なからず喜んでおります。全能で、慈悲深い神が、こうして貴方様に始められたみ業が成し遂げられますように、そしてそれが実を結びますように。「詩編」30篇の御言葉に「というのは、命の泉はあなたにあり、あなたの光に、わたしたちは光を見る」とありますように、神の言葉だけが貴方を輝かせることが出来るのであって、人間の理由で見つけようとしたり、追及したりすることは空しいことであることを完全に理解なさいますように。さらに「詩編」118篇で「御言葉が開かれると、光が射し出で、無口な者にも理解を与えます。」とありますが、これは、神は、私たちの知識を神に与えることを決して黙認されず、しかし、私達には神から知識を得ることを望まれているということと理解できます。というのは、それは、他のいかなる方法でも決して求められず、見つけられることはないからです。私たちは、だれかに欲してはならないし、私たち自身の目でなんとか説明しようと望んではならないのです。そして、神に私たち自身の利害を押し付けるのではなく、神を、神のみを求めるべきなのです。もし、私たちが私たちの利害に注目するのでなければ、神は私達にご自身を示されることでしょう。さもなければ、私たちは決して神を見出すことはできないでしょう。「ヨハネによる福音書」1章で次のように述べられています。「これは真実の光で、全ての人々を照らすのである。」と、そして、「世は彼を認めなかったが、しかし、彼を受け入れたもの全てに、彼は神の子供になる力を与えた。」と。

主は次のように述べられます。「光のあるうちに光の中を歩きなさい。」と。私は神の助けを伴って、この御言葉が閣下の心に残る

ことを懇願します。「マタイによる福音書」10章に、「人々の前で私に告白する者は誰でも、私もまた、天の父の前で、告白します。」とあります。告白しない者は誰も、神はその人を決して認めないのです。どうか、この帝国議会で、このフレーズを、自由に、恐れずに、しばしば、お使いください。というのは、神は私たちと共におられるからです。「詩編」11篇には、「なぜなら、貧しい者は、打ちひしがれ、貧困者はうめき、私は立ち上がり、と主は言われ、そして、彼等の救いを準備しよう。そうすれば、人は彼等の反対者達に自信を持って抵抗することが出来るから。」とあります。

今や、私達は救われるという神の言葉は明白であり、私達は永遠なる神を誉め称えましょう。私達はこの世の力を恐れるのではなく、必要な時はいつでもどこでも、その力の面前で、快活に、恐れず、進み出しましょう。貧しい者が神の国から締め出されたり、私たちと共に、貴方様が滅びに終わることがないように、閣下が助言と影響力を発揮なさいますように。

私はこの勧告をもって、キリストにあって敬愛する友に私たちの一切を委ね、貴方様を祝福せざるにはいられません。1523年聖アンドリュースの日の後の火曜日に記す。

閣下の卑しい僕

アルギュラ・フォン・グランバッハ 旧姓フォン・シュタウフ

②『アダム・フォン・テーリング宛ての手紙 (1523)』

ノイブルクのパラティンの行政官である高貴で敬愛すべきアダム・フォン・テーリングへ²⁾

アルギュラ・フォン・グランバッハ 旧姓フォ

2) *An denEdlen//vnd gestrengen her //ren/Adam vo [n] Thering// der Pfaltzgrauen stat//halter zu Newburg// etc. Ain sandtbriff//vo [n] fraw Argula// vo [n] Grunbach//geborne vo [n] Stauf=//en.5Bl., TE,4° (Augsburg:Philipp Uhart d.A.1523)

ン・シュタウフからの公開書簡

私の尊敬すべき主人であるノイブルクのパラ
ティンの行政官である高貴で敬愛すべきアダ
ム・フォン・テーリングへ

私の敬愛する従兄様へ

神の恵みと平安と聖霊が私の愛する従兄で
ある閣下と共にありますように。貴方様が私
のインゴルシュタット大学へ宛てた書簡につ
いてお知りになり、このことでかなり私につ
いてお怒りになっておられることを聞きました。
おそらく、貴方様は不相応なことをした
愚かな女と思ったに違いありません。もちろ
ん、そのことを私はしっかり理解しているつ
もりです。しかしながら、神に告白するた
めに必要な知恵は、人間の理性からではなく、
神の賜物として認められるものです。しかし、
このことが、私の不面目と恥とあざけりにな
って、巷では、悪意のあるゴシップになってい
ますし、また、これからさらにエスカレート
していくかもしれません。

貴方様は、私の家族の親しい者であるから
こそ、またこのことに注意を払ったのでしょ
う。私は、このことから、閣下のご家族の親
しき友のように私を愛してくださっている
ことを理解しました。そして、このことに、私
は心から感謝します。というのは、もし貴方
様が私に好意を持っておられなかったら、貴
方様は私についてのゴシップに——たとえそ
れが、良いものであろうと悪いものであろう
と——注意を払わなかったことは明らかなか
らです。私への貴方様の友情が明らかだと判
断して、私はその問題の真実について、貴方
様に助言するために手紙を書こうと思ったの
です。私は、だから、貴方様に、私が書いて
きた物の写しを送るつもりです。どうか、私
は貴方様が聖霊によって、この手紙を忠実に
お読みになってくださり、私を判断してくだ
さることを切望します。

この世の知恵は、「ホセア書」4章が示し
ていますが、神の霊を把握することは出来ま
せん。「私は彼らの栄光を恥に変える」とあ
りますように、人間の本質には良いものは何

もなく、私達の中にある本質は、罪なのです。
そして、パウロが「コリントの信徒への手紙
一」3章で、「人間の知恵は神には愚かなも
のです。」と述べています。もし、私が誤っ
て行動したら、もちろん、私は喜んで、その
罰に耐えるでしょう。しかし、貴方様は私を
批判することをお考えにならないください。
というのは、神が私達にすべきだと命じてこ
られたことを実行することに、誰も批判すべ
きではないからです。そして、実に、また、
私は全く、誰にも強制され、従わなければなら
ないとはされてはいないのです。なぜなら、
私は神の存在を信じ、そして、神に信仰を告
白し、悪魔と全ての幻影とを否認することを、
洗礼において、誓ったからです。私が死を通
して新たに生まれ変わるまでは、私は、その
ような高尚な誓いの完成という、希望を決し
てもてないのです。というのは、私達は肉に
おいて生きている間、私達は罪人であるから
です。「箴言」20章に「だれが、私の心が純
粋で私は罪がない者だと、言えようか？」と
あります。そして、「エレミヤ書」17章では、
「人間に信頼している者はのろわれよ。しか
し、神に信頼する人は、祝福されよ。」とあ
ります。

さてご存じのように、私達は「私は信じま
す」、「私は宣誓して捨てます」等の誓いを立
てます。いったい、どの学者が、洗礼におい
て宣誓した誓いが、私が誓ってきたよりも偉
大なのでしょうか？また、どの教皇があるい
は、皇帝が、あるいは君主が私よりも偉大な
誓いを立てたのでしょうか？毎日、私は神に、
私の代父によって私のためになされた誓いが
実現することが出来ますように、祈っていま
す。キリスト信者の信仰に導かれてきた、こ
の恵みを理解できるようになった今、私はそ
れをしっかりと受け入れています。そして、
それは信仰によって、確かにされています。

だから、私の敬愛する従兄様、私が神に告
白することを驚かれませんかように。なぜなら、
非常に多く者に洗礼を授けても、神に告白し
ない者はみな、キリスト者ではないのですか
ら。各人は、最後の審判において、自分自身
について説明しなければなりません。教皇も、

王も、君主も、博士も私と和解したくないのです。私はそのことは、心に留めています。「彼らの銀も金も主の日に、彼らを救うことはない。彼らがおびえているとき、彼らは平安を求めるが、それを見つけることはない。」と、「エゼキエル書」7章で言われているように、また、「ホセア書」8章で「彼らは風の中で蒔き、嵐の中で刈り取る。」とありますように、富は何の助けにもなりません。そうしたことは、富に頼り、その富に仕える者の運命なのです。

私の敬愛する従兄様、もし貴方様が、私がキリストに告白することで、虐待されたり、あざ笑われたりしているとお聞きになっても、どうぞ、腹を立てませんように願います。せめて、私がキリストを否定したとお聞きになったら、警戒してください（ああ、神が守ってくださいますように）。私は神の名誉のために、虐待されることを非常に光栄なことと思えます。そして、人間の知恵に信頼したために、神を辱め、ごまかし、冒涇するとは、つまらないことです。「イザヤ書」40章に「肉の全ては、草であり、その評判はしおれた花のよう。しかし、神の言葉は、永遠に残る。」とされています。私はパウロが「ガラテヤの信徒への手紙」1章で「もし、私が人に気に入られようとし続けるなら、私は主の僕ではありません。」と言った言葉を告げましょう。神は、「ホセア書」13章で「私のほかに神を認めてはならないし、また、私のほかに救い主はいない。」と言っています。そして、「ヨハネによる福音書」2章では、「私を侮り、私の言葉を拒否する者は、その人を裁く者をもつことに気付くであろう。」とあります。

私達が神を認めることを妨げているのは、私達の説教者たちなのです。主は、「エレミヤ書」50章で「私の民は、羊のように道に迷う。彼らの羊飼いだは彼らを道に迷わせる」と、言われ、そして、「エレミヤ書」6章で、「神の言葉は彼らには侮りの対象になり、彼らはそれを受け入れようとしなさい。」と、そして、「エレミヤ書」10章では、「羊飼いだは愚かになる。彼らは主を求めようとしなさい。それで、彼らは何も理解せず、彼らの群れは

すべて、散らされる。」と、そして、「エレミヤ書」23章で、「あなた達はいける神の言葉を曲解し、重荷を押し付けてきた。だから、私はあなた方に、決して、取り去ることが出来ない永遠なる恥とはずかしめを与えよう。」と、そして、パウロは「テモテへの手紙二」4章で「彼らは教師であることを主張し、そして、彼らは語っていることがわからないのです。そして、彼らは嘘を言うことに注意するようになるでしょう。」と述べていますように、いかに、これまで私達の忠実な羊飼いだであるキリストが私たちに、誤った預言や彼らの教えについて注意するように警告してきたことでしょうか。「マタイによる福音書」7章や13章にたとえられているように、主はそれを酸っぱいパン生地と呼び、その少しで、たくさんのパン種を発行させることが出来るとしています。

「マタイによる福音書」17章で、キリストが変容なさる時、「これは私の愛する子、私の心にかなう者。これに聞きなさい。」と、「イザヤ書」42章では、「私がほかに渡す私の栄光」、そして、ヨハネによる福音書1章では、「彼を受け入れた人に、彼は神の子である資格を与えた。」とあります。私はルターに従う者の一人として言われていますが、しかし、私はそうではありません。私はキリストの名で、洗礼を受けました。私が告白したのはキリストであり、ルターではありません。しかし、マルティンもまた、忠実なキリスト者として、また、神に信仰告白をする者です。神は、不面目や、虐待や、投獄や、馬車にぶつけそのため死に直面しようと、信仰を否定しない私達を助けてくださいます。神は全てのキリスト者を助けて、救ってくださいます。アーメン。

私は、私の主人が私を監禁しようとし、もしそれが出来ないことなら、親戚がそうすべきだという報告を貴方様が受けたことを聞きました。しかし、彼を信じてはいけません。ああ、彼は私の中のキリストを非常に苦しめています。「コリントの信徒への手紙二」4章で、パウロは「私達は主の名のために、不平もなしに、全ての事柄に耐えている。それ

で、それは私にとって難しくなく、私はこの問題で、彼に従うべきではない。」と語っています。神も「マタイによる福音書」10章や「マルコによる福音書」8章で、「私達は、父、母、兄弟、姉妹、子供、命、を見放さなければならぬ。」そして、「人はたとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか？」と告げておられます。

以上のとおりなのです。そうでなければ、彼が私たちに告白したくないなら、と神は言われます。しかし、友情、名誉、財産を捨てても、命は、肉には訴えられません。私達は、主とともに死ぬことを約束し、しかし、3度、主を否定した聖ペトロと同じように弱いのです。神は、それが人間であるということの意味していることだとわからせ、ペトロを赦しました。しかし、最後に、神は、彼に聖霊を与えられ、主のために、喜んで死んでいくことができました。神は肉体ではなく聖霊を与えられます。「マタイによる福音書」7章で主は「神に頼む者は誰も、よい霊のため、よい精神に神を求めるものはみな、父からそれを与えられている。」と言っておられます。

私は、このことを全く心にとどめない、権威者たちに、まったく同情することはできません。私は、聖書を読むことを着手し、そして確かな神の命令を発見しようと試みている、聖職者や、世俗の権威者にまだ会っていません。代わりに、彼らは、聖書の中にある全ての知識や基盤を避けて、ののしったり、否定したり、怒ったりしています。しかも、だれも、そのようなキリスト者ではないような振る舞いを弾劾する者はいないのです。

どんなキリスト者がこの状態で沈黙のままにいられるのでしょうか？愚か者とか、あるいは、いやな人が語ることよりも、神が語ってきたことを言うことは彼らに意味しないことなのです。このことは、彼らに聖書を知らせることは、牛がチェスについて知らされると同様ののです。一方、彼らの家畜のしっぺ返しを取り扱うことは、確かに私の仕事ではありません。すなわち、「私は私の良心が信じたものを信じる。」のです。これが、問題の目的ではありません。にもかかわらず、キ

リスト信者は神の言葉を知る責任を持ちます。パウロは、信仰は聞くことからくると言っています。君主達や多くの貴族達もその責任をもつことは同じです。私は次の言葉を聞いてきました。「もし、私の母と父が地獄にいるなら、私は天国に行きたくない。私は、絶対に！」

たとえ、私の友人の全てが、(そんなことがあってはたまりませんが!)私を受け入れなかったとしたら、ぞっとします。彼らの子供達が教えてもらわなければ、それはその親達の過ちです。もし、彼らが学校で教わるのは、テレンスとオウディウス³⁾の文学であろうが。その理由は上記にあげたとおりです。しかし、これらの本の中に何があるのでしょうか？愛し方は、男の恋人や売春婦などにあるということでしょうか。それが、もちろん、選択の自由であり、社会のどのレベルでも結婚するか、しないか、それを恥ずかしがるより、むしろ、それを自慢するような人々でいっぱいです。悲しいことに、売春婦たちや彼らの両親達は、結婚するよりも、むしろ、互いに貞節を尽くす段階に来たということなのです。

このことは、確かに「コリントの信徒への手紙一」5章で聖パウロの言葉「あなた方の間にみだらな行いがあり、それは、異邦人の間にもないほどのみだらな行いです。」に過っています。このことから、泣き言や、けんかや、戦いや暴力が起こります。昼も夜も平和がありません。繁栄と道徳的重圧。一人の女性がすることが何であれ、そしてしばしば、思いがけない惨事を彼女にもたらすのですが、もう他に道はないのです。どうか、神が繁栄と道徳的重圧に対して闘っている者全てを守り、倒れた人々が再び起き上がれるように助けてくださいますように。皆が目が見えなくなった目をこのことに向けます。それにもし、人がそのことについて、友達に不平を言ったら、笑われるでしょう。批判することはして

3) このたとえは「コリントの信徒への手紙一」5章6節のものと考えられる。

オウディウス (Publius Ovidius Naso, 43-17BC) もテレンス (Publius Terentius Afer, 195/185-159 BC) もローマの劇作家、詩人。

はなりません。権威ある者たちは彼らの布の一巻きから、切りました。

私は召喚された帝国議会の会議について、余り興味もなく期待もしていません。どうか、神が聖霊を送って、真実を見る時、彼らにその真実を認めるように教えてくださいますように。それは、この帝国議会の会議はその名に値する価値があるからです。そして、私達は精神も肉体も豊かになることでしょう。全ての者が、真のキリスト教の信仰に支配され、人々の富が決して浪費されず、私達がさらに貧しくなりませんように。もし、神の言葉が、食べること、飲むこと、ご馳走を楽しむこと、ギャンブルすること、仮面劇やそういった類のものと同様にたくさんの注意を払うなら、物事は、すぐに改善するでしょう…。私が覚えている無数のお金が、その帝国議会の会議でどんなに無駄遣いされているのか！一体、何のために使われているのでしょうか？貴方様は私より、もっとよくご存知です。彼らが日夜、貪り食うことに非常に忙しく、ほとんど真っ直ぐに座れないとき、どんな熟考が可能なのでしょう？

私はニュルンベルクでそれをすべて見てきました。君主たちに関する子供じみた行為は、私が生きている限り、思い出すことでしょう。しかし、ああ、主が、「あなたの財産管理について説明しなさい。これからは、あなたは財産管理人である必要はない。」と。そして、神が「ホセア書」8章で言われた「彼らは支配した。しかし私のたつての頼みではなかった。彼らは君主達だった。しかし、私は彼らをそのような者たちとして認めてはいない。」となぜ、言われたのでしょうか。神が問題を正してくださいますように。彼らの輝きの全てに対して、ファラオのような運命を辿らないように祈ります。君主達が熟考して、神の言葉を把握することができますように。それは…神の言葉が彼らに従うべきだというのではなく、むしろ、彼等が神の確かで不変の言葉に従うように理解しますように…という意味ですが。

敬愛する従兄様、私は貴方様に、聖なる聖書に身を捧げる一人の友として懇願します。

貴方様は、長く、君主達のカウンセラーでありました。貴方様は、今こそ、ご自身の不品行な魂に対して、よくお考えになられる時です。もし、少なくとも、貴方様が死ぬ前に、四福音書をお読みになられたら！もちろん、貴方様が神の命令の全てを含んでいる、聖書の全体をお読みになれば、それにこしたことはありません。人にルターの書物（ルターの著作）そのものを信じてもらいたい、というのは、ルターの意向では決してありません。その書物は、単に、神の言葉のガイドブックとして役立つものです。貴方様は、ご自分の領土において、たくさんの善いことをすることが出来になられたのですから…。もし、貴方様が、敬虔で博学な説教者たちのポストをご用意なされれば大変善いことだと思います。

「イザヤ書」55章で、「雨は、種をまく人に、食べ物と種を与え、大地を緑にする。同様に、私の口からでる私の言葉も、実りなしには、私の元に戻らない。」と言っていますように、神の言葉は、救いの全てに働くのです。「エレミヤ書」22章では「私の言葉は火のようである。岩を打ち砕くハンマーのようである。」としています。私の夫は、今の職をやめさせられることになっていることを知っています。早くからそのことが私を圧迫していました。しかし、それは、ピラトの場合のように、私の救いの邪魔をすることはありません。私はすべてを、命でさえも、失う覚悟をしています。神が私を守ってくださいますように。私は自身、罪を犯さざるをえません。神が私の信仰を増してくださいますように、私のために神に心から祈ってください。たとえ、そのことが、私の目的を意味するのであっても、不面目として見なすのではなく、神をほめたたえますように。もし、私が恵みにあるなら、私の魂は主なる神に対して、価値ある宝石のようでしょう。

彼等が、私からとることができる財産は、ほとんど何もありません。貴方様は、私の父が、バイエルンの君主達の下で滅ぼされたこと、そして、その子供達は乞食になったこと、しかし、彼らは私の夫に職を与えることによって、私や私の子供達も十分よく、扱われまし

たが、そのことを貴方様はご存知です。神が彼らに報いてくださいますように。ヴェルツブルクの説教者たちは私の夫の財産を使い果たしてきましたが、神は確かに、空の鳥を養ったように、私の四人の子供の面倒を見てくださり、そして、野原の花のように、子どもたちに衣を着せてくださることでしょう。神はそのことを言ってこられました。私は嘘をつくことは出来ない、と。

私は自分で書いた物を個人的なものとしておこうと思ってきました。今、私は神が、それが公になることを望まれていることを理解しました。私が今、このことに対して、ののしられることは、それが神のものだという良い印です。というのは、もし、この世がそれを褒めることが、それは神のものではないでしょうに。だから、私の敬愛する従兄様、私は貴方様に、今、そして、永遠に、神の恵みを託します。そのことが、あなたとともに、今も、そして永遠にありますように。グルムバッハ。

アルギュラ・フォン・グルムバッハ・シュタウフ

③『レーゲンスブルクの人々宛ての書簡(1524)』

貴族の夫人であるアルギュラ・フォン・バッハによるレーゲンスブルクの人々への公開書簡

私の友であるレーゲンスブルク市の敬愛する慎重で、賢明なる行政官と参事会へ⁴⁾

神の恵みと平安が、キリストに結ばれた、私の敬愛する兄弟達に、満ち溢れるほど広がりますように。私は、最近、神の言葉に反対する、そして、サタンが率先する、活動的でものすごい勢いの一つの命令がこの市に公表されたことを聞きました。そして、それは、まるで「ペトロの手紙一」5章のように、つ

まり、「あなたがたは見張っていないさい。なぜか？なぜなら、あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、誰かを食い尽くそうと、探し回っているからです。あなたがたは、強い信仰をもって彼に抵抗すべきです。」なのです。

おお、神よ、あなた方が逃げるのが遅すぎて「マタイによる福音書」24章で主が言われるように、冬や安息日にならないように、あなた方がどうか、これらの言葉を心にとめてくださいますように。主は私たちが、聖なる場所に腰を据える、憎むべき破壊者を見るべきだと言います。どうか、あなた方の目を見開いてください。その時は、本当に来たのです。そして、それは、彼が何であるかが明らかに分かる日なのです。教皇やその廷臣たち、全党派、貴方方は彼の権力下にあります。主があなた方を助けに来てくださり、私達すべてを照らしてくださいますように。というのは、同じ箇所では「主の到来は、それに現れ、世の一つの終わりから別へと見られる、稲妻の光のようなものである。」と言っておられるからです。この章が言っていることをどうか、熟考してください。本当にこの箇所は主が強く主張されておられる箇所です。

さらに、あなた方がこのようなやり方で、神に反対することを最初に説き伏せられる帝国の市になることに私の心は痛みます。それは、真実は、ただ一つだからです。なぜなら、神は「詩編」144編で、「大いなる主、限りなく賛美される主、その力は終わることがない」と述べているように、全ての主なる者の中の主であるからである。あるいは、「申命記」10章に、「主は神々の中の神、主なる者の中の主、偉大にして、勇ましく畏るべき神である。そして、誰をも偏ってみない方である。」と述べられているからです。

これが、私がキリストの一員として、あなた方に書かざるをえない理由なのです。私の理解力の不十分さをもって、最も書くべきではない人物だとするのは公平ではありません。私は福音を恥としない者であって、福音に信頼する者には、神の力の支えがあるのです。キリスト者であろうとする者である私は、

4) *Ein Sendbrief der edeln// Frauen Argula Staufferin/ An die// von Regenuburg./M.D.XXiii.2 Bl., 4° (N?rnberg:Hans Hergot 1524)

「マタイによる福音書」10章で、主が、「だれでも人々の前で、自分を私の仲間であると言いつける者は、わたしも天の父の前で、その人を私の仲間であると言いつける。しかし、人々の前で、私を知らないという者は、私も天の父の前で、その人を知らないと言いつける」と教えられているように、また、「ローマの信徒への手紙」で、「口でイエスは主であると言いつける者は、救われる…」と言われているように、神に告白しなければならぬのです。

この貧しく、か弱い女があなた方に言っていることは、神のことであって、どうか、くれぐれもあなた方の気分を害さないようにお願いします。世の慣習によれば、私はあなた方にとっても、横に並ぶこともできないということをよく知っています。しかしながら、神は見下された者を愛されます。そして、他人がどうであれ、私は自分のタラントンを埋めるようなことはしたくありません。「エゼキエル書」33章の言葉は私達全てに向けられているものです。すなわち、「もし、あなたがたが罪を犯した者をとがめないなら、私はあなた方の手に彼らの命を求める。」という言葉です。私はあなた方が誤っていることが分かります。また、世で賢いとされる多くの者たちによって、このことに対して、私をあざ笑っていることを十分知っていますが、しかし、神の命令によって私はあなた方に言いたいのです。「しかし、神は世の智慧を愚かなものにされた。」と「コリントの信徒への手紙一」1章20節にありますように。パウロは「ガラテヤの信徒への手紙」1章で「もし、わたしが人の気に入ろうとしているなら、私はキリストの僕ではありません」と言っています。私達は自分の利益を求めるべきではなく、神の名誉と栄光を求めるべきなのです。パウロも「エフェソの信徒への手紙」4章で「私達はもはや子供であるべきではないのです。古く、誤った人間の智慧の教えによったり、風のように変わりやすい教えによったり、私たちに取り入ったり、そそのかしたりしようとする者たちの不正やずるさによったりすべきではないのです。」と言っています。

おお、私の愛する兄弟達よ、どうか、あな

た方を抑圧するこの狼たちに気をつけてください。彼らはすぐ手近に身をかかれています。覆い隠すものによって、あなた方がその穴に落ちて永遠に滅びることのないように、神があなた方を、彼らのお腹を満たそうとする者から、守ってくださいますように。神は確かにあなた方に「めん鳥が雛を羽根の下に集めるように、わたしはあなたがたを何度集めようとしたことか。あなたがたは断り、そしてそれから、神はあなたがたについて泣いた。」と言っておられます。「ルカによる福音書」19章では「そして、あなたがたが、あなた方の訪問の日を認めたのなら、あなたがたは私と共に泣くであろう。」とあります。

おお、私の愛する兄弟達よ、神はあなた方に見張り人であり監督者であるように任命していることを心にとめてください。あなた方に委ねられた魂が、銀や金によるのではなく、主イエスの犠牲の赤い血により、もたらしてきたことを、意識してください。「ペトロの手紙一」1章で、「今や、眠りから起き上がり、私達の目を主にとどめる時である」とあります。これは、私達の救いは、私達が信仰に入った頃よりも近づいているからです。「ローマの信徒への手紙」13章で、古い慣習や伝統的方法によって、墮落してはならないとあり、また、主は、「ヨハネによる福音書」14章で、「私は道であり、真理であり、命である」と言っておられます。主は「私は慣習的なものである」とは言われません。「エレミヤ書」17章では「主よ、あなたを離れ去るものは皆、生ける水の源である主を捨て、それで、彼らは辱めを受けるであろう」とあります。

「イザヤ書」55章で、主が私たちに「渴いている者は皆、ここに、水のある所に来なさい。何ももたない者、銀も金もお金もなく買う者は来なさい」と親しく呼びかけられていることに耳を傾けてください。同様に、主は「ヨハネによる福音書」7章で、「渴いている人は誰でも、私のところへ来なさい」と招いておられます。主は私たちに人間の命令、あるいは、教皇の命令に注意を向けさせてはいません。「ヨハネによる福音書」1章で、「彼

は彼を受け入れた人をみな、神の子になる資格を与えた。しかし、彼が彼自身のところに来たとき、彼らは彼を認めなかった。」とあります。神は今、それが別の方法であると認めているのです。

ですから、神の敵に対して、騎士のように戦いましょう。そして、唇の勢いをもって、彼らを死に至らせましょう。神の言葉は私達の武器になるに違いありません。私達は武器で攻撃してはならないのです。私達の隣人を愛さなければならないのです。「ヨハネによる福音書」13章で、主が述べているように、お互いに平和を保つ必要があるのです。主が「このことが私の掟として、あなたがたに与えるものである。」と述べられている通りです。「イザヤ書」33章で、主は「私の口から出る言葉は、かならず、実を結ぶ」とも言われています。

以上が、私があなた方にどうしても書きたかった理由であり、今、あなた方にぜひ勧めてもらいたかったのです。今や、まさに石が、私達の中で、叫び出す時です。「ルカによる福音書」19章にありますように。たとえ、直ちに、この勧告が、私の愚かさ故に、退けられようとも、「コリントの信徒への手紙一」4章で、パウロが言っているように「私は、神が、私達を世のかすのようであり、死に値し、また、世界中に見世物の鏡だと示していることを認め」ようとも…。

今、神があなた方に慈悲深くありますように。そして神が神のご意志で問題を指導してくださいますように祈ります。1524年、ペトロとパウロの日、レンティングにてとり急ぎ書きました。

アルギュラ・フォン・グルムバッハ 旧姓フォン・シュタウフ